

Jhumpa Lahiri による「学歴移民」のアイデンティティ 新しい移民ナラティブの可能性

石川志野

はじめに

1999年に短編集 *Interpreter of Maladies* でデビューしたインド系アメリカ人作家 Jhumpa Lahiri (1967-)は、*The Norton Anthology of American Literature* の第7版では、収録作品の最後を飾ることからわかるとおり、いまやアメリカ文学を代表する作家のひとりとなった。彼女の作品は、インド系アメリカ人一世および二世のアイデンティティ構築や家族関係などを中心にディアスポラ、トランスナショナル、多文化共生、ハイブリディティなどをキーワードとして読み解かれる傾向にある。Shiga は “Transpacific/ Transatlantic Indians: A Multicultural Reading of Jhumpa Lahiri” において、Lahiri 作品に現れるトランスアトランティック、ポピュラー音楽およびセンチメンタリズムという側面に着目し、*The Namesake* をマルチカルチャリズムとロックミュージックという切り口から、“Hema and Kaushik”を感傷小説との関連で論じた。また、Friedman は、*The Namesake* を論じ、コスモポリタニズム的な人間を書いた新しい移民小説であることやトラベル・ナラティブとの関連性などを指摘した (111)。

アメリカでの、移民文学というジャンルの形成は比較的早い段階におこる。おおよそ 1820 年からはじまり 1860 年頃とされる第一の移民の波に続き、1870 年から 1913 年に、約 2500 万人がアメリカに移民し、移民文学の供給と受容が 1920 年代初頭から亢進した。この時期の移民文学には、自伝、社会科学、写実主義的フィクションという類型があった。貧しいユダヤ系移民がゲットーから自分の才覚と努力をもって這い上がり、成功を手にする物語などが代表的な移民文学のかたちである (Elliot 383)。自分の親の世代の、インド系移民一世の経験を題材にすることが多い Lahiri の作品は、この移民文学の自伝的要素の伝統を継ぐといえる。その一方で、1965 年の移民法以降のインド系移民の経験や自意識は旧来の移民とは著しく異なると推測することが可能だ。そのため Friedman の指摘にもあるように、Lahiri 作品は新しい形の移民ナラティブであると考えられることができるだろう。

Koshy は、アジア系アメリカ人作家を 1940 年まで、1940 年から 1970 年、1970 年から現在までの三期に分類している。Lahiri は同じインド系の Bharati Mukherjee (1840-2017) や韓国系の Chang-rae Lee (1963-) と並び、三期を代表する作家である (1047)。黎明期の移民文学と現在のアジア系アメリカ人作家の作品の内容の違いは、アジア系移民がアメリカ社会の中でどのような役割を引き受けるのかという、社会的な背景が影響しているはずである。

現在アメリカでの大学進学率は 50% を超えており¹、大学生や教授がアメリカ文学に登場することは珍しくない²。インド系移民作家の Jhumpa Lahiri の作品には、高学歴で専門職の人物が多い。彼らの大学は、Massachusetts Institute of Technology、Yale University、Columbia University などアイビーリーグに属するなど、知名度が高く世界の大学ランキングの上位に名前があがる大学ばかりである³。本稿では Lahiri 作品における「学歴移民」に注目し、Lahiri が生み出す新しい移民文学の意義を考察する。

1. 「学歴移民」とはなにか

インド系移民は子どもたちの学業達成に意欲を燃やす。彼らの優先順位の筆頭は教育であり、子どもたちはオール A や A+ の成績を取ることを期待されることが常である (Bacon 64)。Lahiri 作品には、こういった典型的なインド系移民の親子の姿が描かれている。例えば “Only Goodness” の両親は、我が子の学業成績を他のベンガル系移民の子ども達と競わせていた。弱冠 20 才で博

* 本稿執筆にあたっては、慶應義塾大学教授・巽孝之先生ならびに大串尚代先生からご指導を賜った。ここに記して感謝を申し上げたい。

¹ Education Indicators In Focus 2014/02 (February) OECD (2018/8/30 閲覧)

² アメリカ文学には、大学生が主な登場人物となる “campus novel” と大学教授が主人公の “academic novel” というジャンルがある (Williams 561-563)。

³ Academic Ranking Universities 2017 www.shanghairanking.com/ja/ARWU2014.html (2018/8/30 閲覧)

士号をとったり、12才でStanford Universityに入るような傑出した頭脳の持ち主達の載っている新聞記事を読ませたり、Sudhaがまだ12才のときにHarvard Medical Schoolの応募書類を取り寄せ勉学に励むことを促す。その結果SudhaはLondon Universityへ、RahulはCornell Universityへと進学する。また、Harvard Medical Schoolで教えていた父の判断で、Amidは、アイビー・リーグへの進学率の良い寄宿舎学校に通うことになる。その学校で彼はただ一人のインド系の学生だった。The NamesakeのGogolはYale UniversityとColumbia Universityを出て、建築家に、MoushumiはBrown UniversityとNew York Universityで学び大学教員になろうとしている。

“When Mr. Pirazad Came To Dine”(1999)には、1971年にアメリカで暮らすインド系の両親が、移民二世の10歳の娘に進学へのひとかたならぬ期待をかけている様子が書かれている。この母親にとってのアメリカは、“a safe life, an easy life, a fine education, every opportunity”「安全で気楽な暮らしがあり、質の良い教育を受けることができ、どんなチャンスでもある」希望に満ちた場所であり(26)、娘を良い学校に入学させるために、熱心に勉強をするように仕向ける。インド系移民二世の娘は平均的なアメリカの公的教育を受けているため、アメリカの歴史や十三州の位置関係や州都のことは良く知っているのだが、東パキスタンの正確な場所やインドからの分離独立運動とそれに伴う第三次インド・パキスタン戦争については、何も知らないのである。父親は自分達のルーツであるインドやパキスタンの地理も、分離独立についての時事についても全く理解していない娘に、それらの知識を機会をみつけて教えようとするが、母親はいまは私たちはアメリカにいるのだからそんなことは娘には関係ないことだととりあわない(26-27)。今現在、自分の故国でおきている出来事であり、世界的にニュースになっている事柄だとしても、アメリカに移民してきた母親にとっては、それは自分達の日常から切り離された、さして重要ではない出来事になってしまっている。インド系移民から、さらに発展して「アメリカ人」そのものとして生きていくことで、さらなる未来が拓けるはずの娘には、民族的ルーツのあるインドやパキスタンの歴史や時事問題よりも、現在家族で移り住んでいるアメリカという新しい土地の歴史や地理の勉強の方が必要かつ重要な知識であるというのが、この母親の認識なのである。インド系移民として必要な知識は、アメリカ人化するためのアメリカに関する文化や歴史であり、意識的にアメリカ人として変身を遂げることが成功への切り札となるという考え方が母親には、はっきりとある⁴。

以上のようにLahiriは、子ども達の学業達成を強く願う移民一世の親や移民二世の学業達成の成果である学歴を取り上げることが多い。

では移民には、なぜ一定以上の学歴が必要になるのか、また彼らが獲得した学歴の持つ意味とは、どんなものだろうか。

Bourdieuによれば、社会資本は、経済的な資本、文化的な資本、社会関係に関する資本に分けることができる。経済資本、文化資本、社会関係資本のそれぞれをどの程度持ち合わせているかで、個人の社会的地位即ち階級が決まる。それらの社会資本をいかに保つか、または更に増加させ、階級内外での自らの位置を維持・向上を狙う行動のことを「再生産」という(『ディスタンクシオンI』199)。

移民としてアメリカにやってきて、どの程度の社会的地位を望んで社会参加していくかは、どのようなアメリカ人として生きていきたいのかということが問われるという意味である。言い換えれば新しい自己の構築、アイデンティの書き換え、社会階層の移動など、さまざまな自己をめぐる、自らの価値づけを新しい場所で再び初めからやり直す作業といえる。母国での出身階層は一度白紙に戻ると仮定すると、アメリカ社会に参入する際に問題とされるのは、経済資本および文化資本である。通常、旧社会から離脱して、新しい別の社会に参加した新参者の場合、社会関係資本は皆無に等しいことが多いが、個人が持ち合わせる経済資本、文化資本の量は旧社会でどのような生活をしてきたのかに左右される。経済資本が乏しい移民が、経済的に豊かになるために移民した例は1840年代後半のジャガイモ飢饉のアイルランド系移民である。母国にいても仕事や土地がないなどの理由で、経済的に困窮していた社会階層が低い人々が、徒手空拳でアメリカにやってきたのである。彼らは単純労働の担い手として移民した「労

⁴ 宮島は、移民の家庭内での一貫したアメリカの歴史文化に関する知識の欠如が子どもの学習の妨げになることを指摘している。意識的な学習をしない限り、他文化で育った子どもたちには、漠然としか理解できない事象が多い(132)。

働移民」であるが、1965年以降に移民を目指した専門職もしくは留学生の場合はアメリカにやってくる前の段階で、すでに後期中等教育や高等教育を受けることができる十分な経済資本・文化資本を持ちあわせた環境にあった。母国での社会階層は最下層ではなく中流以上であり、少なくとも一定の教育・学歴という文化資本を携えてアメリカ社会に参入することになる。

Lahiri 作品の専門職や留学生である主人公達にとっての重要な社会資本は学歴であり、彼らを「学歴移民」「Immigrant Meritocrats」と定義することができる。

作品中の学歴移民をここで挙げてみたい。The Namesake の Ashoke は、Massachusetts Institute of Technology (MIT) で電気工学の博士号を取るためにアメリカにやって来て、のちに大学で教える職に就く(2003)。“The Third and Final Continent”の主人公は1964年にLondon Universityに留学したのち、1969年にMITの図書館での就職のために渡米する(1999)。“Hell-Heaven”のPranab Kakuはカルカッタの裕福な家庭の出身でMITで工学を学ぶために留学した。“Hema and Kaushik”のKaushikの父は1962年にアメリカに留学して博士号を取っており、1965年以降にアメリカに来たHemaの両親はインドの中産階級の出身であるが、それよりもクラスが上である(2008)。以上のようにLahiri作品の学歴移民は、インド社会での出身階層が著しく低いわけではない。しかし、彼らは母国のインド以外で学び、その結果獲得した学歴(修士号や博士号)を活かしてアメリカでさらに安定した収入や生活を得ている。

学歴という文化資本は全世界共通の物差しでその価値を計ることが可能で、学校のレベルの差が問題にされる場合もあるが、同じ大卒、大学院卒であれば、対外的には能力は同等とされる。

“The Third and Final Continent”(1999)には、自分の家におく下宿人を選ぶときに、Harvard UniversityかMassachusetts Institute of Technologyのどちらかに通う学生であることに唯一、判断基準を持つ老婆がでてくる。

“Yes, good afternoon, madame. I am calling about the room for rent.”

“Harvard or Tech?”

“I beg your pardon?”

“Are you from Harvard or Tech?”

Gathering that Tech referred to the Massachusetts

Institute of technology, I replied, “I work at Dewy Library,”

adding tentatively, “at Tech”

“I only rent rooms to boys from Harvard or Tech!”(177)

この100歳を越える老女は、どちらかの大学に通っているという事実があるだけで、その人物が下宿人にふさわしいと考えており、極めて明確な基準で物事を判断している。したがってその学生がエスニック・マイノリティのインド系でも一向に気に留めない。上の会話を見ても、電話では、外見・容貌がわからないため、人種や民族や何系アメリカ人かといったことを判断するのは難しいはずだが、出自を尋ねることは一切ない。学歴のみが話題にのぼり、学校の名前だけを問題にしている。実際に会った際も、この学生は、どこの国の出身かという質問はされなかった。電話の主のインド系アメリカ人は下宿人になることをあっさり許されたし、過去にもブラジル人がその家に住んだことがあった。Harvard UniversityかMassachusetts Institute of Technologyという学歴がある男子学生であれば、何系アメリカ人かどんな国籍であるかは全く問われないのである。これは学歴が人種や民族的な指標を越えて有効に作用した例といえる。

学歴は、一度学位を取ってしまえば、永久に変わらない評価を得ることができる。卒業した学校が社会的に認められていれば、さらに有利な条件の下で生きていくこともできる。学歴はマイノリティである移民を差別化し、社会階層の上昇、より有利な条件での階層の固定化に役立つ有効な手段であり、社会資本として重要である。インド系移民の主人公達が、アメリカ人としてのハビトゥスを身につけ、アメリカでの社会階層の上位に根付いていく目的で学歴資本を獲得する姿がLahiri作品には多く書かれている。学歴は、もとの階級から上昇または下降するための重要な要因になる。また、「学歴上の成功は主として相続文化資本の量と、学校教育制度への投資傾向の大きさによって決まる」(ブルデュー185)ため、違う文化で育った移民一世は長くアメリカにいる他のアメリカ人に比べ、相続できる文化資本の量が少ないので、教育に投資をしなければならない。学歴資本は文化資本の不足を補うだけの十分な資力を持っていな

れば他者との競争の場面で勝者になれず、社会階層の上昇は望めないのである。移民でマイノリティのインド系アメリカ人の主人公達の学歴が権威的なものになりがちなのは、実際のところ彼らにとって有効な社会資本としての学歴は、アイビーリーグ・クラス⁵のアメリカでの高等教育でヒエラルキーの最上位か、それに比するレベルの大学でなければならないことが理由であり、その現れである。

移民の第一世代が抱える問題は、第一に言葉の壁だと言われている⁶。この点でインド系の移民は、インド国内にいるときに英語教育を受ける機会に恵まれることも多く、社会のなかで英語を使用する機会があるため、英語以外の言語を母語とする他の移民と比べて、言語の面でアメリカに来てすぐに優位な立場になるはずである⁷。*The Lowland*には、インドで有数の大学を卒業してアメリカに到着直後に英語に戸惑う Gauri の様子が書かれている。

For a few minutes Subhash turned on the car radio, listening to a man report local news, the weather forecast. She'd had an English education, she'd studied at Presidency, and yet she could barely understand the broadcast.(125)

英語で高等教育を受けてきた Gauri は、アメリカに来てラジオを通して現地で使われている英語と、インドで学んで来た英語との違いに衝撃をうける。ここで今までの自分の教育について改めて振り返った Gauri は、これまで長く英語教育を受け、Presidency Universityに通っていたことで構築された自分のアイデンティティが揺らぐ瞬間を経験する⁸。インドで広く使用されておりなじみのあるイギリス英語と今まで聞いたことがあまりないアメリカ英語との違いや、ラジオ放送特有の言い回しやスピードの速さに彼女が慣れていなかったことも理解を阻んだ一因なのかもしれないが、このときに Gauri は英語という言語を通してアメリカという他文化や、アメリカ人という他者に初めて出会ったといえる。

インド国内で英語で教えられる西洋式のカリキュラムの英語教育が正式に取り入れられたのは 1835 年からである。それ以前はサンスクリット語、アラビア語もしくはペルシア語での教育が東インド会社の支援のもとに行われていた。Thomas Babington Macaulay(1800-1859)は、インド統治をする上での最適な階層の形成を計画し、英語教育を施した英語話者のインド人達が、イギリス人と同様の嗜好、考え方、道徳、知性に変化することを期待した。彼は *Minute on Education* (1835 年 2 月 2 日)において西洋の文化と英語教育が植民地インドでの教育の基本であるべきだと主張した⁹。この覚書以降、オリエンタリストと呼ばれたサンスクリット語などの伝統的な言語での教育を推進した人々の勢力が衰えはじめ、インド国内では英語教育が主流となった。

Lahiri 作品の主要な登場人物は、ほとんどがベンガル人で、出身地のベンガル地方では、19 世紀のはじめごろから、バッドラロックと呼ばれる有力な地主層の一部が、英語で行われる西洋式教育を熱心に受け入れはじめていた¹⁰。英語教育や西洋の学問を早々に受容し、英語話者になるとともに、その文化も受け入れたベンガル人は、イギリス帝国統治下のインドにおいては統治側の主人に唯々諾々と従うことができる「有能」な人材であると見なされた。

⁵ アイビーリーグとは、アメリカ北東部にある 8 校の名門私立大学（ハーバード大学、イエール大学、ペンシルバニア大学、プリンストン大学、コロンビア大学、ブラウン大学、ダートマス大学、コーネル大学）を指す。こ 8 大学で形成されたスポーツ競技の連盟組織に由来を持ち、古い歴史があり、蔦（Ivy）の絡まる校舎に象徴されるような伝統や格式がある。www.princeton.edu/~aia/aiaivy/ivyleague (2018/9/26 閲覧) Oxford English Dictionary によれば Ivy League という語がはじめて使われたのは 1933 年の NY Herald Tribune である。

⁶ 移民の子どもとネイティブの子どもとの違いのひとつには、家庭の使用言語がその土地の第一言語と異なることにあり、それが学力格差につながる。そのため教育では言語支援が重要となる (OECD2011)。

⁷ 例えばアイルランド系移民は、他の移民グループと比較し圧倒的に有利であった。それは彼らが英語話者だったので新たに言語習得の必要がなかったからである (松尾 120)。

⁸ プレジデンスー大学(Presidency College)は、コルカタにある 1817 年創立の大学で、Gayatri Chakravorty Spivak(1942-)もここで学んだ。「Presidency University」www.presiuniv.ac.in/web/presidency_history.php (2018/8/31 閲覧)

⁹ Minute by the Hon'ble T. B. Macaulay, dated the 2nd February 1835
www.columbia.edu/itc/mealac/pritchett/00generallinks/macaulay/txt_minute_education_1835.html (2018/8/31 閲覧)

¹⁰ Friedman は Ganguli の家族が、このバッドラロックの家系であることの可能性を指摘している (125)。

イギリスのインドにおける教育は、英語英文学研究を基本におき、被支配者（インド人）を扱いやすいように支配者（イギリス人）側の価値観や倫理観を理解し、抵抗をなくすことを目的とした。つまりイギリスが政治的、経済的、文化的にインドを完全に統治するために、英文学研究を用いて、西洋的な思想や道徳をインド人に浸透させようとしたのだ。そしてイギリス植民地時代から続き、長く高いレベルで、上記のような英語教育を受けてきたことは、現代のポストコロニアルの時代において、ベンガルのインド系移民が、アメリカに専門職や留学生として受け入れられる素地になったと考えられる。

2. Lahiri の教育観

それでは Lahiri 自身はどのような教育を受け、どういった教育観を持っているのだろうか。Lahiri は、Barnard College¹¹で英文学を学び、Boston University で英語英文学、クリエイティブ・ライティング、比較文学の修士号を、ルネサンス研究で博士号をとった「高学歴」の持ち主である。正統的英文学科のカリキュラムのもとで、ラテン語を学習し、Chaucer、Spenser、Shakespeare などの英文学を学んだ Lahiri は、Virginia Woolf、Proust、Nabokov や Hawthorne など¹²にも親しむ文学体験をしてきている (Leyda 68–69)。作家自身が高等教育を受けたかどうかは必ずしも小説を書く際に主要な要素になるわけではないが、自分が受けてきた教育の履歴や知的な環境で育った経験が作品の内容に反映していることは否めない。Lahiri の持つ教育観は、過去に受けた教育や獲得した学歴を肯定するものであることが作品から窺える。

ベンガル人の両親のもとにロンドンに生まれ、幼少時にロードアイランド州に移住し、そこで育ったインド系アメリカ人である Lahiri は、“Indian-American”つまり「インド系アメリカ人」であることに対し、インドとアメリカのつまりハイフンのどちらの文化からもプレッシャーを受け一方で、自分はインド人でもアメリカ人でもどちらでもないのではないかという気持ちにさいなまれながら育ってきたという。ハイフン付きのアメリカ人で、「移民」であることが、今までの Lahiri の作品には色濃く反映されている。こういったルーツと今の生活の本拠のある国の文化の二つの世界で生きなければいけないという感覚は、特に移民二世に強いと言われる。“at home” ととらえられる一世の生まれた母国と、移り住んだ先の“neighborhood”と考えられているアメリカという、双方の国の文化が彼らの現実の生活に深く関わっているのである (Bacon 60)。

継続的に移民が流入したことで、アメリカ社会は階層が生まれ、民族的に多様になった。新しくその社会に参加する移民が、既存の社会構成員よりも高い地位を得て、自らの階層を上昇させるためには、物理的に移動し、より有利な職場をみつけるか、もしくは高い技術や知識を身につけ、経済的に自立することが必要になる (紀平 11)。アメリカにやってくる移民は、母国にいたままでは、叶えることができない夢を持ってアメリカ大陸に渡ってくる。その夢の実現には一定の基準以上の技術や社会資本が必要である。Lahiri はインド系移民である両親についてこう述べている。

... With the friends my parents have made over the years in the United States, there's a cutting across of class lines. Not radically- they tend to befriend people those have desk jobs and a certain level of education and a certain kind of life. (“An Interview with Jhumpa Lahiri” Leyda 77)

Lahiri の両親はインドからロンドンへ、その後アメリカに移民してきたインド系アメリカ人で、父は University of Rhode Island の図書館に勤めていた。両親は子ども時代の彼女が、付き合いのあるひとびとの間に階層の差があることをぼんやり感じとれるような生活をしており、そこに生まれる階層の差は“it's not that they're wealthy; it's just that education can become leverage”(Leyda

¹¹ バーナード大学 (Barnard College) は、1889 年創立の女子大が起源であり、女性にも男性と同等の教育の機会を主張した第十代コロンビア大学学長のフレドリック・バーナードが設立に関わっている。

¹² “Unaccustomed Earth”のエピグラフには、ホーソンの “The Custom-House” の一節 “Human nature will not flourish, anymore than a potato, if it be planted, for too long a series of generations, in the same worn-out soil. My children have had other birthplaces, and, so far as their fortunes may be within my control, shall strike their roots into unaccustomed earth.”が記されている。

77)であると述べる。つまり経済的に豊かかどうかは問題にされるのではなく、教育こそが階層の上昇をもたらす主要な要因なのである。

新しくアメリカ社会に参加した個人が同じスタートラインについている場合、その人が現在持っている能力が、他者と比較してどれくらい優れているかによって今後の彼らの人生は決まってくる。そういった個人の能力の向上・改善をはかる手段として「教育」は重要な役割を果たした。教育は社会の標準化をもたらし平等化するのではなく、人々の間の階層化の促進、個人と個人に格差の拡大をもたらし、それらを維持する制度となった(紀平 11)。教育には、移民同士を差異化し、アメリカ社会に包摂させ、さらに社会的地位を上昇させる機能があるといえる。移民にとって教育は移民先の国で自分達の立ち位置を左右する大変重要な意味と機能を持つ。

1967年生まれのLahiriは、1969年にベンガル系インド人の両親とともにイギリスからアメリカに移民したが、その少し前にアメリカでは、その移民政策が大きな転換期を迎えていた。1960年代における公民権運動の大きなうねりの影響を受け、アメリカ国内では人権を擁護する意識や人種、性別などによる不平等を撤廃する気運が高まっていた。このような社会的背景もあり、出身国別に移民の数を割り当てることでその数を制限してきた、人種差別的な移民の選抜を肯定する「出身国別割当制度」が1965年に撤廃され、新しい移民法が制定されたのである(Farber 210-11)。この制度撤廃に伴いインド系移民だけでなく、今まで移民が実質禁じられていたアジア系移民が、留学生または技術者として「技能・職能」枠で入国し、その後、家族を呼び寄せるといった形態が広まった。この家族の呼び寄せには数の制限が全くなかったため移民の総数は飛躍的に増加した(石川 107)。また従来は農業、工業、建設業といった産業に従事するためにアメリカに移民していたインド系移民も、1965年以降は専門職に就く目的でアメリカを目指すようになった。したがってインド系移民は医師、科学者、技術者などのエリートグループに属しているものが大半をしめるようになる¹³(チャン 228)。さらに1965年から1975年の間に移民したインド系の人々がアメリカに来た最大の理由は、大学での学位獲得のためであった(Bacon 64)。

Lahiriはインタビューの中で、1965年以降に移民した両親のことをこのように語っている。

My own parents both come from very average middle-class backgrounds in Calcutta, but because my father entered the country as an academic, and remained in the world of academics, that informed everything; where we lived how we lived, what his salary could provide. (Leyda 77)

移民でマイノリティであった彼女の両親は、教育の力を利用して、アメリカ国内でも中流もしくはそれ以上と見なされる生活を無理なくできる安定した収入の見込める専門的な仕事を獲得した。その結果、車を持ち、郊外の小綺麗な家に住むような「それなりの暮らし」を維持することができたのである。

1965年の移民法以後、アメリカに移民する人々には、数においても質においても大きな変化があった。インド系の移民もその影響を受け、アメリカ社会への適応や経済・社会地位への意識の変化が起こったのである。子どもの将来を見据えて、今までのインド系移民一世が持っていた子弟の教育についての理想や理念は変化を余儀なくされた。つまり自分達のエスニック・アイデンティティを保持することよりも、早急にアメリカの文化を生活に取り入れ、精神的にもアメリカ人と同化することをよりいっそう進めることを優先するよう変容していったのである¹⁴。このことは、Lahiriの作品で書かれる1965年以降のインド系移民の姿にも反映されているといえる。

3. 新しい移民のナラティブ

¹³ 特にニューヨークなどの大都市にはインド系ホワイトカラーの会社員が増え、1965年以降に、総計43万人のインド系が移民した(チャン 228)。

¹⁴ 労働市場でのより高度・専門的な職種と熟練を必要としない低賃金単純労働との二極化が進むことにより、経済的な不平等も広がっている。移民の第2世代が経済的成功を収めるためにはかつてヨーロッパからの移民の子孫が数世代を要して克服した教育の格差をより短い年数で超える必要がある(村井 65-66)。

以上のように、Lahiri 作品には、高学歴、専門職のインド系アメリカ人の生活が書かれておりモデル・マイノリティ¹⁵小説と分類することができる。Lahiri は、レストランや搾取労働工場で働く人々を書かないのはなぜかと問われ、その質問に答えるのは難しいと答えている。

... If these characters have a Subaru and a yard, that means they don't have problems like real immigrants. Somehow, my characters aren't regarded as the real immigrants who really sweated it out. And on some level, it's true: my parents' generation didn't come here to dig the subways. On the other hand, it doesn't detract from the difficulties they experienced. (Leyda 77-78 下線部筆者)

彼女が言う「本物の移民」でない移民とは、社会資本に恵まれホワイトカラーの職業に就いている「モデル・マイノリティ」のことを指す。「本物の移民」と Lahiri が定義する搾取工場で現業に従事するような、ホワイトカラーでない移民が、アメリカにおいて消滅したり、その数が際立って少なくなったわけでは決してない。しかしアメリカ文学上のアジア系移民ナラティブで描かれる人々は「本物の移民」から「モデル・マイノリティ」へと、時代とともに変化しているのである。

モデル・マイノリティたちは、日常の生活上で同化をすることにさほど困難や問題を感じるものが少ない。異文化から来た異邦人がアメリカ社会で受容される困難や、アメリカ文化を受け入れる際の葛藤を主題にした移民一世のころの移民文学とは違い、同化をしたあとに個人の生活におこる問題、自己の内面の葛藤、アイデンティティの確立などに関わる出来事が移民ナラティブの中心になってきたと考えられる。そのようなアメリカの移民ナラティブの中心を担うモデル・マイノリティがアメリカ社会の中で成功するためには、教育における学業達成が最重要事項であり鍵となるため、彼らが主人公の新しい移民ナラティブには教育や学歴に関連する内容が含まれることが多いと解される。つまり Lahiri の作品に高学歴が多い理由は、それが 1965 年以降の新しい移民を中心に据えた「モデル・マイノリティ小説」であることにある。ここにおいて移民ナラティブは高学歴、専門職のひとつとがアメリカ社会に順調に同化した後のそれぞれの物語へと姿を変えたのである。

おわりに

移民は、母国から新天地での新しい生活、新たな夢を求めてアメリカへ移動してきた人々である。彼らの「アメリカの夢」の一つには、社会階層上の地位の向上がある。マイノリティとして、新しいアメリカ社会で受け入れられたうえで、さらなる地位の向上を望み、社会的基盤を得るためには、なんらかの社会資本、たとえば農業・工業技術や芸術の才能または学歴などが必要となる。移民がアメリカでの社会的立場を盤石なものにするためには、学歴資本に代表されるような充実した社会資本を得てモデル・マイノリティとして生きるなど、様々な努力や工夫が不可欠なのだ。

本稿でみてきたように、Lahiri 作品の登場人物たちの重要な社会資本である学歴は、移民法改正の歴史やインド系移民の立場を反映したものであった。その学歴は自己の確立や自己の地位の確保、すなわち社会階層の上昇を担保するためのものであり、インド系移民がアメリカ社会で他の移民と自己を差別化するための有効な手段が学歴という社会資本を得ることなのである。そのために獲得された学歴の基礎になった学問のことを問えば、もともとインドがイギリスの植民地であり、イギリスの帝国主義のもとに英語教育が長く取り入れられていたことの遺産であることが明らかになる。

Lahiri は学歴移民としてのインド系アメリカ人を書き、1965 年以降のインド系移民の有り様が変化したことを示した。彼らは母国以外で教育を受けることで、武器となる社会資本すなわち学歴資本を手し、マイノリティであっても移民先のアメリカ社会で、社会階層の中位以上に移

¹⁵ モデル・マイノリティの「モデル」ということばには、模範的であり、従順で、お手本となるようなという意味が込められている。誰にとつてのモデルかと問えば、アメリカ政府やアメリカ社会のような、マイノリティがその一員として属している権威にとつての「モデル」である。このモデル・マイノリティという概念は、1960 年代に現れたもので、日系や中国系アメリカ人の民族同化の成功物語が雑誌に取り上げられたことが始まりである (リー 199)

動することが可能になった。学歴資本は彼らの人生の基本であり、登場人物達のアイデンティティの重要な一部である。Lahiri 作品に学歴が登場することが多いのはこのためである。Lahiri は、アメリカを創ってきたその移民のなかでも、特に学歴移民としてのインド系移民に焦点をあてた作品を書く事で、新しい移民ナラティブを創り出したのである。

BIBLIOGRAPHY

Primary Sources

- Lahiri, Jhumpa. *Interpreter of Maladies*. Houghton, 1999. 小川高義訳『停電の夜に』新潮社、2012年。
---. *The Lowland*. Bloomsbury, 2013. 小川高義訳、『低地』新潮社、2014年。
---. *The Namesake*. Mariner, 2003. 小川高義訳、『その名にちなんで』新潮社、2010年。
---. *Unaccustomed Earth*. Random, 2008. 小川高義訳『見知らぬ場所』新潮社、2008年。
---. 『べつの言葉で』中島浩郎訳、東京：新潮社、2015年。
---. “My Two Lives.” *Newsweek*, vol. 43, 2006.

Secondary Sources

- Ahmad, Aijaz. *In Theory: Classes, Nations, and Literatures*. Verso, 2008.
- Bacon, Jean. *Life Lines: Community, Family, and Assimilation Among Asian Indian Immigrants*. Oxford UP, 1996.
- Bloom, Allan. *Closing American Mind: How Higher Education Has Failed Democracy and Impoverished the Souls of Today's Students*. Simon, 1987. 菅野盾樹訳、『アメリカン・マインドの終焉』みすず書房、1988年。
- Dhingra, Lavina, et al., editors. *Naming Jhumpa Lahiri: Canons and Controversies*. Lexington, 2012.
- Elliott, Emory, ed. *Columbia History of The American Novel*. Columbia UP, 1991.
- Friedman, Natalie. “From Hybrids to Tourists: Children of Immigrants in Jhumpa Lahiri’s *The Namesake*.” *Critique*. vol.50.1, 2008, pp.111–28.
- Gassuto, Leonard et al., editors. *The Cambridge History of The American Novel*. Cambridge UP, 2011.
- Kaplan, Amy and Donald E. Pease, eds. *Cultures of United States Imperialism*. Duke UP, 1993.
- Koshy, Susan. “The Rise of the Asian American Novel.” Gassuto and Virginia, pp.1046-63.
- Leyda, Julia. “An Interview with Jhumpa Lahiri.” *Contemporary Women’s Writing*, vol.5, 2011, pp.66–83.
- Shiga, Syunsuke. *Transpacific/Transatlantic Indians: A Multicultural Reading of Jhumpa Lahiri*. MS Thesis, Keio U, 2013.
- Viswanathan, Gauri. *Masks Of Conquest: Literary Study and British Rule in India the 25th Anniversary Edition*. Columbia UP, 2015.
- Williams, Jeffrey J. “The Rise of the Academic Novel.” *American Literary History*, vol 24.3, 2014, pp.561-89.
- 石川敬史「原国籍割当制度の廃止」『資料で読むアメリカ文化史⑤アメリカ的価値観の変容 1960年代—20世紀末』古谷旬編、東京大学出版、2006年、103–115頁。
- OECD 編著『移民の子どもと格差 学力を支える教育政策と実践』斎藤里美監訳、明石書店、2013年。
- 紀平英作編『新版世界各国史 24 アメリカ史』山川出版、1999年。

- 古賀正則・内藤雅雄・浜口恒夫編著『移民から市民へ 世界のインド系コミュニティ』東京大学出版会、2000年。
- チャン、スーチェン編纂トーマス・アーチディコン『アジア系アメリカ人の光と陰 アジア系アメリカ移民の歴史』住居広士訳、大学教育出版、2010年。*Asian Americans: An Interpretive History. Simon& Shuster, 1991.*
- 鳥羽美鈴「インド系英語作家にみる排除と包摂 ジュンパ・ラヒリを事例に」関西学院大学 先端社会研究所紀要 11号、2014年。
- 浜渦哲雄著『大英帝国インド総督列伝 イギリスはいかにインドを統治したか』中央公論社、1999年
- ブルデュー、ピエール『ディスタンクシオンI、II』石井洋二郎訳、藤原書店、1990年。
- 『遺産相続者たち』石井洋二郎監訳、藤原書店、1997年。
- ブルデュー、ピエール、ジャンクロード・パスロン『再生産』宮島喬訳、藤原書店、1999年。
- 本田毅彦『インド植民地官僚 大英帝国の超エリートたち』講談社、2001年。
- 宮島喬編『文化の社会学 実践と再生産のメカニズム』有信堂、1999年。
- メトカーフ、バーバラ・D、トーマス・R・メトカーフ『ケンブリッジ版世界各国史 インドの歴史』河野肇訳、創土社、2006年。
- 吉原真里『「アジア人」はいかにしてクラシック音楽家になったのか？人種・ジェンダー・文化資本』アルテスパブリッシング、2013年。*Musicians from a Different Shore: Asians and Asian Americans in Classical Music. Temple UP, 2007.*
- リー、ロバート・G『オリエンタルズ 大衆文化のなかのアジア系アメリカ人』貴堂嘉之訳、岩波書店、2007年。*ORIENTALS: Asian Americans In Popular Culture. Temple UP, 1999.*

